

間像である。これは、道緯がいう「外現<sup>ゴウゲン</sup>三孝順、内懷<sup>ネイケ</sup>三不孝<sup>フコウ</sup>、外現<sup>ゴウゲン</sup>三精進<sup>サンショウジン</sup>、内懷<sup>ネイケ</sup>三不実<sup>フマツ</sup>」といっている「悪人」である。

ともあれ、賢・愚の問題については『愚禿鈔』をみることによつて、いっそう明白になつてくる。『愚禿鈔』では

聞<sup>キク</sup>賢者<sup>ケンシャ</sup>信<sup>シン</sup> 頭<sup>カウ</sup>愚禿<sup>グ</sup>心<sup>シン</sup>

賢者<sup>ケンシャ</sup>信<sup>シン</sup> 内賢<sup>ネイケン</sup>外愚<sup>ゲイグ</sup>也

愚禿<sup>グ</sup>心<sup>シン</sup> 内愚<sup>ネイグ</sup>外賢<sup>ゲイケン</sup>也

とあり、信と心において内賢外愚なる賢者と、内愚外賢なる愚者という二つの人間像があらわされている。前者は、信を獲得することにおいて内なる愚性に目覚めことのできた賢者であつて、その賢者は内に愚性をもつが故に賢者の振舞いをするのがなく、外にあらわれる相は愚であるとする。(何故にこのようなことが言えるかといへば、親鸞がここでいう賢者とは親鸞にとって善知識であつた法然であることは明らかであるし、その法然自身が「愚者にかえりて往生す」と言っているからである。)後者は、信を獲得することなく、己れの心で己れを捉えるが故に、己れの内なる愚性に目覚めることのできない愚者であつて、その愚者は自己の愚性に目覚めることなきが故に、賢者の振舞いをし、外にあらわれる相は賢であるとする。

親鸞はこのように内賢外愚なる賢者、内愚外賢なる愚者について語つてはいるが、いわゆる内賢外賢なる賢者、内愚外愚なる愚者については語っていない。賢・愚について一般的に考えられることからいへば、内賢外賢が人間の理想像であり、次が内賢外愚であり、内愚外賢、内愚外愚という順序であるのに対し、親鸞に

とつては内賢外愚、内賢外賢、内愚外愚、内愚外賢の順序であり、そのうちの内賢外賢、内愚外愚という方の人間は、むしろ非存在として捉えられていたのではないかということが、以上のことから想像される。親鸞にとっての人間観は内賢外愚なる賢者か、内愚外賢なる愚者の人間像しかなく、極論すれば、内愚外賢なる相が人間の真実なる相であるとして捉えられていたのではあるまいか。『改邪鈔』においては、たとえ牛泥棒といわれようとも賢者が如き振舞いをすることを誡めてある。

故に、親鸞のいう「愚」とは(信心同異の問題とも関連してくるが)決して知識的な智賢に対する相対的愚ではなく、存在そのものが「愚」であるような「愚」、絶対的愚、存在そのものの名告りであつて、決して卑謙の詞とはいえない。そして、その絶対的愚といわれる「愚」は無碍の光明に遇うことによつてのみしかその深淵を我々にのぞかせようとはしない。

## 声聞・独覺・菩薩について

——十地経離垢地の問題——

平野 修

声聞・独覺・菩薩

歴史的に見て、仏教の要点は積尊の初転法輪と入滅にあると考えられる。この二点から仏陀の弟子ということを考えてみたい。積尊の教化(『転法輪』)によつて、利益を得る者があらわれて

きた。又、釈尊にしたがって出家する者が多くでてきた。ここに仏・法・僧の三宝が円満する仏教が歴史を確保したのである。三宝の円満こそ仏教であり、同時にその事が他の宗教・思想との差異となる。

## ※ ※

釈尊在世において隠れていた様々な問題が釈尊の入滅を契機に現実となった。その中で、最大の問題は三宝の欠如であろう。あらゆる事がこの事に起因していると言ってもよいであろう。

無仏ということから法・僧の在り方が問いなおされてきたのである。今、声聞・独覚・菩薩ということもこの点から問題にされねばならない。

十地経第二離垢地においては十善業道という点からこの三乗の問題を考えている。

「これらの十善業道は狭心 (pradesika-citta) と、三界をおそれる心と大悲心なきことと、他に聞いたことにしたが、音声にしたがう智の相によって修習されるとき、声聞乗を成就する」

十善業道は戒であり、仏陀によって示された実践徳目であり、又、衆生の生活上の課題でもある。それが仏陀に依存し、その言葉のみを信ずる出家者にどれだけ深く実践されるか？ はなはだ狭いのである。ただ、「苦をおそれ、有情に無関心」(十地経論)で「自利のみをなす」(同上) 逃避的な在り方、したがって「我や有情等の施設即ちそれらを名のみと理解して、無我に入る」(同上) 理智的な在り方でしか十善業道が受けとられないのである。声聞とはこのように出家者が(もつと)広く言へば人間存在が

内包する真実に対する本質的な在り方について言われる言葉である。

次に独覚に対して経・経論では

「他に指導されず、自然の性にしたが、自ら覺して他に求めず、大悲と方便を欠き、深い縁性を覚る」(十地経)

「彼れ(独覚者)は教説に依らず覺し、法を説くことを願わない」(十地経論)と示されている。

これは独覚の特殊性を示している。つまり、仏陀の教説を必要としないものであるから、仏弟子ではない。しかし悟りは仏陀と共通する。が、仏陀とは呼ばれない。かと言って決して外道とは言わない。そういう理由で独覚の発生は仏教内にもあり、仏教外にもあると考えられる。仏教内とは仏陀の指導を拒む部行独覚を指し、外とは、麟角喻独覚を言うのであろう。

入中論では

「独覚は福德と智慧とが増すという点で声聞より勝れているが、福德智慧の資糧も大悲一切種智等がないので正覚者よりも劣っているから「中」である」(入中論第一章序章)

と独覚の位置を仏と声聞の中間に置いている。しかも「入中論」は独覚の発生を

「かの声聞と独覚は如来の説法から生ずる」(入中論第一章第一偈長行)としている。とすれば、独覚は仏陀の世界を自らの立場で限定するものと考えられる。又、独覚には三宝が成就しないのである。したがって彼れは「溪谷や林の中」に住まざるを得ない。このような点から独覚にとって十善業道は牢獄に於て戒律を

守るほどの意味しかもたない。

以上が大乗においてみられた修道者への批判である。声聞・独覺とは求道上でもどうしても出てくる人間の本質的な在り方である。仏陀に随順する相をとりながら独立しえない声聞的な在り方、また、仏陀から独立する相をとりながら孤立せざるを得ない独覺的な在り方、この二つが仏陀の入滅を機に出でた求道上の課題であった、と言ってよい。

仏陀の初転法輪によつての三宝の成就とは右のような人間に関する本質的な在り方の廻転ということであつたであらう。だから入滅後の仏教徒の課題は真に三宝の成就ということにあつたに相

違ない。その課題に答えてきたのが菩薩ということであらう。仏を礼し、法を嘆じてしかも人間の問題を背負うことが可能であるもの、それこそが三宝の成就したものである。（『普賢十大願』）だから、声聞・独覺と菩薩の間には超え難い断絶がある。この断絶を表現するのに大乘教典は非常に荘大で渾り難い世界を現出せしめた、と言へるであらう。

菩薩は単にジャータカにあらわれたものの延長にあるのではない。そんな語義上の問題でないであらう。深く広い現実根差す実践上の問題であらう。

（七八頁の続き）

大谷学会

◇春季公開講演会

五月三十日 午後一時より

於 図書館講堂

一、「カリスマ」ト「プレスティージ」

高橋 憲昭

一、晋宋革命をめぐる仏教徒

塚本 善隆

出席者、六〇余名。